

—— 家族の生活基盤及び就労形態の分析手法 ——

福山市立女短大 ○津川 淳 奥山清美 加納三子 三谷璋子
 倉田美恵 土屋房江 鈴木雅子

目的. これまでに、家族の④生活状況、⑤社会意識、⑥食生活に対する認識と実態、⑦食生活の実態、⑧健康状態などに関する相互の関連性を分析してきたが、今回は、家族の生活基盤及び就労形態の相異による④、⑤、⑧の分析と相互の関連性について検討していく。

方法. この研究は、昭和50年以後の継続研究であり、基本的な研究方法は、第1～9報に同じ。今回は、各種のクロス集計によるタイプ別の分析を行った。

結果. これまでの生活状況の分析結果から、④年令 ⑤家族形態 ⑥職業 ⑦母親の就労状況 ⑧学歴 ⑨収入などが家族の生活基盤を構成し、これらが相互に関連しながら他の生活状況を規定する独立変数となっていることがわかった。そして、この独立変数の中、特に、⑥、⑦、⑧、⑨は、その他の独立変数及び従属変数を規定する因子として機能していた。そこで、これらの4因子を組み合わせることによる家族の生活状況を特徴づけるタイプを設定した。さらに、この組み合わせの中から、①家族の生活基盤を分析するのに適したタイプとして、(職業)×[学歴]×母親の就労状況による分析(分析①)と、②家族の就労状態を分析するのに適したタイプとして、(家族形態)×[職業]×母親の就労状況による分析(分析②)を行った。そして、それぞれの分析手法は、それぞれの属性及び特徴を説明するのに十分な相異があることがわかった。